

令和2年度学内公募研究（地域連携型）
〔研究論文〕

弘前市仲町伝統的建造物群保存地区における 地域協働型の木工看板デザイン

中村 琢巳¹⁾, 太齋 里捺²⁾, 木村 崇之³⁾

The Cooperative Design Project of Wooden Sign in Preservation District
for Groups of Historic Buildings

Takumi NAKAMURA¹⁾, Rina DASAI²⁾, Takayuki KIMURA³⁾

Abstract

We worked on the cooperative design project of wooden sign of public *samurai* family house in HIROSAKI. We considered the harmony with the historic *samurai* landscape and traditional craftsmanship. When deciding the design, we also considered a process of resident's participation. Therefore, design suggestion meetings by students were also held. This project aimed to become a model of sign planning in preservation district from the viewpoint of both of the design and the production process.

1 木工看板プロジェクトの背景と目的

青森県弘前市仲町伝統的建造物群保存地区にある公開武家住宅（旧伊東家住宅）の老朽化した文化財案内看板（写真1）を、大学と木工家、地域住民、弘前市の連携によって、歴史的町並みに調和するデザインへ更新するプロジェクトを実施した。建築学科・中村琢巳研究室では、2018年度から2019年度にかけて文化庁補助事業「弘前市仲町伝統的建造物群保存地区保存計画見直し調査」を弘前市から受託し、町並みの保存活用と現代的居住環境の向上に資する計画提言を行った（東北工業大学建築史研究室編『弘前市仲町伝統的建造物群保存地区保存計画見直し調査報告書』弘前市教育委員会、2020.3）。この保存計画見直し事業のなかで、大学と地域住民、行政との連携に基づき、今回のプロジェクトの対象である公開武家住宅「旧伊東家住宅」の活用が活発化するなどの展開もあった。こうしたなかで、調査事業に引き続き、中村研究室では文化財案内看板を地

-
- 1) 東北工業大学 建築学部 建築学科 准教授
Associate Professor, Department of Architecture, Tohoku Institute of Technology
 - 2) 東北工業大学 工学部 建築学科 学生（2020年度卒）
Student, Department of Architecture, Tohoku Institute of Technology
 - 3) 有限会社 木村木品製作所 代表取締役
CEO, Kimura Woodcraft Factory Ltd.

域との連携によりデザイン・制作するプロジェクトに取り組むことになった。

本プロジェクトの目的は、単に老朽化した看板を更新するだけでなく、研究面で次の4点を意識した。

第一に、対象敷地が町並み保存地区の歴史的な武家住宅であり、歴史的町並みや周辺環境に調和するデザインを目指すこと（写真2）。第二に、伝統的な武家町の町並みをつくりだしている当地の素材や技術を魅せるものにし、単なる視覚的・景観的なデザインにとどまらず、地域の伝統技術の継承にも資する制作とすること。第三に、ここ数年、旧伊東家住宅は地域住民（伝建保存会）による「活用」が活発化しており、そうした活用事業の案内・告知にもフレキシブルに対応する案内板を目指すこと（写真3, 4）。第四に、看板のデザイン・制作プロセスを地域協働型にして、デザイン発表会等の学生・地域とのコミュニケーションを積み重ねることによって、ひいては地域住民に歴史的町並みに関心をもってもらえること。

2 制作の方法について

1) 実測調査と事例収集

まず現行の看板の仕様を把握すべく、寸法や加工方法などの実測調査を行った（写真5）。また、デザインの参考事例収集として、青森県弘前市弘前城周辺の看板や仲町伝統的建造物群保存地区の看板、公開武家住宅4棟の意匠的特色を調査した。現状の看板については問題点として、老朽化が著しいことや町並みとの調和が考慮されていないこ



写真1 老朽化した看板



写真2 保存地区の歴史的町並み



写真3 旧伊東家住宅での展示例



写真4 古武術演武による活用例

とが挙げられる。こうした点に加えて、公開武家住宅の活用イベント告知に対応できていないこと、時期や曜日により異なる公開武家住宅4棟の「公開状況」が表示できておらず、保存地区の回遊性という視点が弱い点も改善点として把握できた。

2) 弘前の木工家との ZOOM ミーティング

本プロジェクトは、青森ヒバやリングの木といった地元産にこだわり、かつ優れた現代的デザインの制作に取り組む木村木品製作所とのコラボレーションで進める体制とした。しかしながら、コロナ禍によって、仙台の中村研究室と弘前の木村木品製作所とは継続的な現地打ち合わせが不可能な状況となってしまった。そこで、ZOOMでミーティングを継続的に実施し、学生のデザイン提案と木村木品製作所からのフィードバックを受けながら、計画を詰めていった。ZOOMミーティングにより、学生による画面上の詳細なスケッチの提示のしやすさ、あるいは木村から参考となる事例写真の迅速なアップ等、デザイン制作を進めるうえでの利点もあった。

また、地元弘前で活動する木工家との協働により、看板の素材面でも幅を広げることができた。たとえば大学側は、武家住宅に多く使われる青森ヒバによって、伝統技術をアピールするアイデアであった。それに対して木村は、青森ヒバに加えて、弘前手打ち金物職人による加飾を提案した。その結果、「木と鉄」が融合するという、伝統技術の表現を試みることになった。実際、武家住宅の門や扉には、青森ヒバと飾り金物が共存する。

こうしたミーティングを重ねることで、武家住宅の閑静な町並みに調和し、地域の材料を用いた伝統技術を魅せる看板の設計を進めていった。町並みに調和する看板という面では、旧伊東家住宅の門や塀とのプロポーションや、人間の目線高さ、看板の屋根部分との兼ね合いを考慮し、「町並みに調和する寸法」も重要な設計要素としてスタディに取り組んだ。

3) 地域へのデザイン提案と意見交換

こうした進めた設計図に基づいて、旧伊東家住宅で新たな木工看板のコンセプトや提案のプレゼンテーションを行った（写真6）。地域住民と公開武家住宅を普段から案内・管理する保存会メンバー、弘前市文化財課職員も参加し、さまざまな視点から意見をうかがった。たとえば保存会からは公開武家住宅全4棟を見てもらえる回遊性を促すような効果への期待、あるいはマップ表示の見やすさ・わかりやすさなどの指摘があった。



写真5 既存看板の実測調査



写真6 地区住民とのデザイン検討

また弘前市からは長期的な視点にたち、たとえば今後、あらたに公開武家住宅が増えても表示を対応できるフレキシブルな看板にしたいという要望があがった。

こうした地域との意見交換を経て、看板内のマップ・表示のデザイン検討や金物の形、素材と寸法の詳細を決定して、下記のような意匠図にまとめていった（図1）。

3 木工看板デザインのコンセプト

設計した木工看板（写真7）のデザイン的な特色をまとめると、以下のようになる。

1) 閑静な武家町との調和

第一に閑静な住宅地である武家町への調和に配慮し、伝統的な駒札の形態から逸脱せず、シンプルな全体の輪郭を設計した。商業地にある町家の町並みであれば、華やかな装飾や重厚感、あるいは人目をひく奇抜なデザインという看板もありえよう。しかしながら、落ち着いた武家町の風致を意識し、全体はシンプルな意匠とした。シンプルの中で、木組みやジョイント部分などのディテールにおいて、素材感で伝統技術を表現するデザインとした。

2) 地域の伝統素材を活用する

木工の材料としては、当地域の伝統建築の素材である「青森ヒバ」を用いた。数百年という長い年月を経て成木となる為、木目が緻密で美しく、看板の役割としての情報発

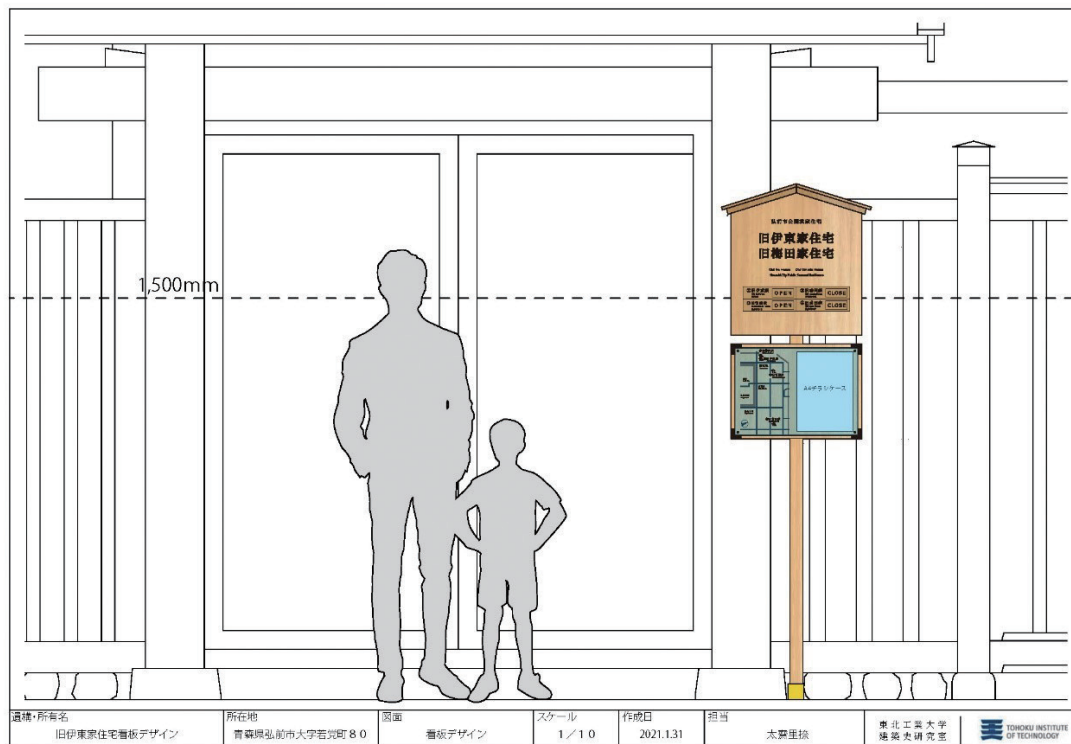


図1 旧伊東家住宅の文化財案内看板の設計図（立面図）

信という機能を際立てつつも地域材でなじみのあるものとした。また看板は屋外に設置する為、雪にも強く、耐久性のすぐれた材として青森ヒバはふさわしい。

弘前の伝統手打ち金物職人による加飾を、看板の角金物や吊り金具等に用いた。旧伊東家住宅や周辺の武家住宅には表門を構える住宅も多くあり、伝統的な棟門にはシンプルな金物が多く用いられている。そこで、今回制作する看板でも金物をデザイン的に取り入れることによって歴史町並みに調和し、地域の伝統技術を魅せることができると考えた。

3) 寸法の配慮

寸法については門や塀との高さ関係を考慮して、現存の看板のボリュームと比較しつつ町並みに調和するように設計した。現存の看板は看板の脚の左側が門の柱の右側と寸法がぴったり重なっており、看板を外から見た際に非常にすっきりとした印象をうけた。このことから、同様な見え方を目指して視覚的にもシンプルな寸法を進めた。看板屋根部分が棟門に掛からないこと、冠木との高さ関係、人間の目線高さも考慮して寸法を検討した。

4) 看板の表示・機能

公開武家住宅の公開状況はイベント時やお祭りの時期等、一年の中で細かく変化する為、公開時間や日程をフレキシブルで分かりやすく表示するようにした。そこで、公開武家住宅の公開状況は木札の裏表を変えることで表示の切り替えをできるようにした(写真8)。活用イベントでの告知に対応できるようアクリルのチラシケースも設けた(写真9)。

今後、公開武家住宅が増えることも考えられ、それを見据えて対応できるようなデザインとした。そのため住宅名は現在の4棟の下に余白を大きく設けることで増加に対応できるようにした。周辺マップ部分は、道路や川など不変なものはヒバの木の板に直接レーザーで刻む一方で、住宅名と住宅のマークはアクリル板にシール張とし今後の公開武家住宅の増加にアクリル板のみでフレキシブルに対応できるようなデザインとした。



写真7 完成した木工看板



写真8 開館状況を表裏で表現する木札（上）

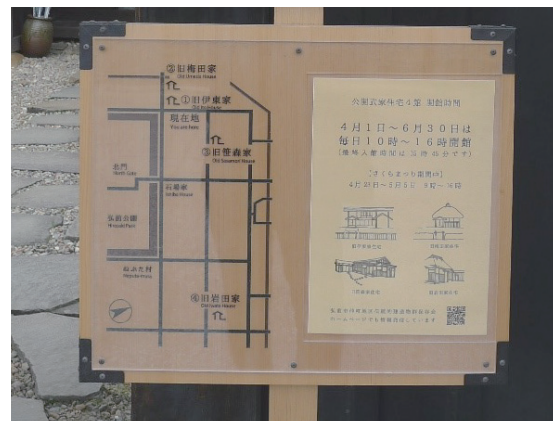


写真9 活用イベントチラシの収納ケース（右）

4 成果と課題

以上のように地元の木工家、町並み保存団体、文化財行政とのコラボレーションを通して、地域のニーズにこたえ、かつ閑静な武家町の歴史的景観に調和することを考慮し、木工看板を設計・竣工することができた。通常、町並み保存地区であっても、味気ない鉄製看板などが多い中、こうした青森ヒバを主体として、手打ち金物の意匠など技術的な表現も重視した看板が立つことで、今後のこの町並み保存地区の保存修景への関心を高める波及効果も期待している。

2021年度も引き続き、中村研究室では弘前市公開武家住宅「旧岩田家住宅」の看板デザイン制作に取り組んでおり、この「旧伊東家住宅」のプロジェクトを活かして、歴史的町並みに調和するデザインのさらなる提案を目指している。